

## 運転士の異常時対応能力向上に向けた教育プログラムの開発

喜岡恵子 澤貢 北村康宏 赤塚肇

運転士は、自列車により鉄道運転事故や輸送障害(以下、「事故」と略す)が発生したとき、原因が把握できなければ不安になったり、自身のエラーが事故の端緒になっていれば動揺したりするだろう。そのような感情の動きに注意資源が奪われて異常時の対応ができなかったり、異常時対応を終えたところで事故をどのように報告するか注意資源が奪われてエラーをしたりすることがある。そこで、そのような心理状況を擬似体験し、エラーが事故に繋がらないよう、エラーを重ねないようにするための教育プログラムを、列車運転シミュレータを利用して開発した。シミュレータには5つのエラー誘発課題を組み込み、18名の現職運転士に実施し、さまざまなフィードバックを行ってプログラムの妥当性を検証した。図はフィードバックの一例である。運転行動を可視化することにより、自身の誤り

に気づいたり、運転の特徴を意識化したり、エラー過程の理解を深められるようにした。

(鉄道総研報告, 2009年9月号)

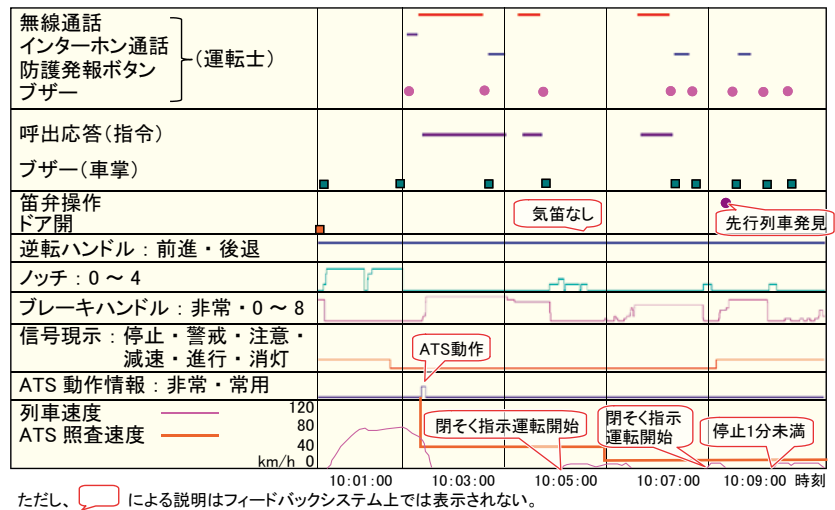


図 課題3(信号機消灯)における運転環境と運転行動

## 安全意識向上のための事故のグループ懇談手法の開発

重森雅嘉

ヒヤリハット経験や職場の安全に関する工夫など、現場の社員ひとりひとりが持っているリスク情報が共有されにくくなってきている。そこで、リスク情報の共有と安全意識向上を目指した事故のグループ懇談手法を開発した。

これはファシリテータの進行により、4, 5人の参加者が事故やヒヤリハットの発生状況、原因、対策などについて経験を中心に話し合うものである。事故のグループ懇談を行うことにより、事故やヒヤリハットの重大性の認識、危険感受性の向上、工夫の共有、リスク経験の共有、対策の難しさの気づき、リスクへの共感が促される。

実際に、運転現場等において事故のグループ懇談を実施し、参加者に、まったく有効でない(1点)~非常に有効である(5点)で評価を求めたところ、平均して4点以上の得点が得られ、このような活動がリスク情報の共有や安全意識の向上に役立つことが確認された。

(鉄道総研報告, 2009年9月号)

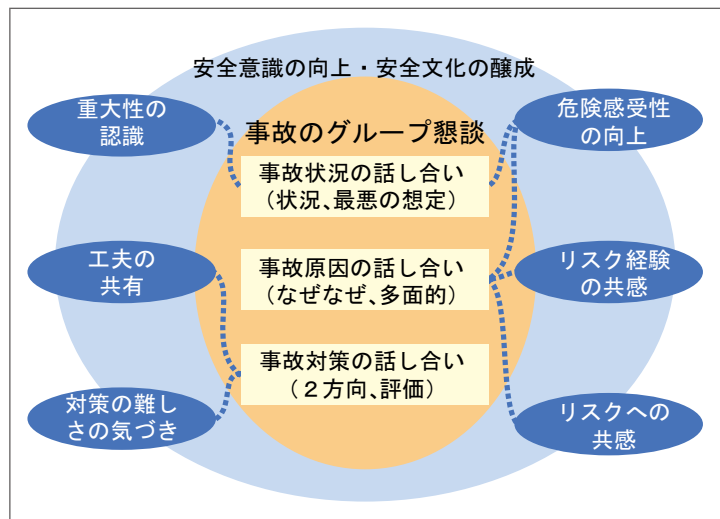


図 事故のグループ懇談会の概要と機能